

Title	"Turkenbuchlein"における中世の予言の影響に関する一考察
Sub Title	The influence of Medieval prophecies on the "Turkenbuchlein" : Islam and apocalypticism in the 16th Century Europe
Author	宮本, 陽子(Miyamoto, Youko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.4 (1990. 12) ,p.1(353)- 27(379)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19901200-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

“Türkenbüchlein”における中世の影響

影響に關する一考察

富 本 陽 子

四

いたこの危機の時代に、どのようなトルコ人觀、イスラム觀を醸成していくかを読みとることができる。

先ず、この時代の出版狀況を概観してみるとしよう。一四五五年にヨハン・グーテンブルグによつて發明された活版印刷術は速やかに広まり一五〇〇年までに三万三千五百点の本が出版されてゐる。これは一万一千五千種のテキストが一五〇〇万～一六〇〇万部のコピーとして現われたといふことになる。⁽⁵⁾しかし一五世紀においては印刷にふれるのは、既に手書き本として人氣の高かつたものに限られており、出版が世論形成の要素として台頭していくのは、ようやく一五〇〇～一五一年頃のことである。一五五〇年頃までは、手書き本は特殊な學術的目的を除いては殆ど用いられないままであるが、外よりはオスマン帝国の進攻にねらわれて

になる。一六世紀を通じては一五万～一〇万点の本が出版されており、これは少なく見積っても一億五千万～一億部のロッパーの出版を意味する⁽⁷⁾。

世論の形成に与へて力あるのは、内容の良否を問わず、よく読まれた本、ひいてはよく売れ、発行部数の多かった本である。このいわば、この小論の文脈においては、数多くの „Türkenbüchlein“ のうち一六世紀において出版されたものが、トルコ人に関するヨーロッパの世論の形成において中心的役割を果たしたこと意味している。だが、先行する中世、ルネサンス期のトルコ並びにイスラム関係の文献は、一六世紀にも何度も翻訳され版を重ねているのであるから、一五世紀以前の出版物にも留意する必要がある⁽⁸⁾。

一六世紀の „Türkenbüchlein“ の出版数には四つのピーグがあり、リオザエル戦争の尖鋭化に対応している。即ち、第一期は一五一六～一五二一年（セバッチの戦い、第一次ウィーン包囲、スレイマーンのオーストリア遠征）、第二期は一五四〇～一五四一年（スレイマーンの遠征とオーフォンの包囲、カール五世のアルジヒア遠征）、第三期は一五七〇～一五七一年（レペントの海戦）、第四期は一五九四～一六〇〇年（カラキアの抵

抗運動、メフメト二世のバンガリー遠征、オーストリアの永いトルコ戦争）である⁽⁹⁾。

第一期において最も多く読まれた „Türkenbüchlein“ は Fr. Georgius de Hungaria (Captivus Septencastrensis) の *Tractatus de ritu et moribus Turcorum* (初版一四八〇年頃) であり、その版数（一五三〇～一五三一年に羅語 11版、独語 7⁽¹⁰⁾版）を上回る⁽¹¹⁾。ただ、第一次ウイーン包囲の記録 (*Die Belagerung der Statt Wien* 等の表題を持つ) “はからだぬ” (一五二九年に独語 19版)。

一五三一年初版の Paolo Giovio, *Commentario delle cose de' Turchi* は一五三七～一五四一年に一五版 (母語 五版、羅語 五版、仏語 11版、独語 11版、チヒ語 一版)、一六〇〇年めでにば 1111版 (母語 九版、羅語 五版、仏語 五版、独語 11版、チヒ語 一版) を数え⁽¹²⁾、この数は、次の Bartholomaeus Georgijević の次ぐのみである。

Georgijević の „Türkenbüchlein“ (*De afflictione tam captivorum quam etiam sub Turcae tributio viventium Christianorum* 一五四四年、*De Turcarum ritu et caeremoniis* 一五四五五年、*Prognoma sive praesagium*

Mehemetanorum | 五回五冊) は | 大半紀にわたるトルコ・ベラル関係書中の「ベテヤー」である。一六〇〇年から三回三版(羅語 111版、仏語 6版、英語 7版、伊語 5版、蘭語 11版、チヒ語 11版)を重ねて(13)¹²。

この他 | 五一八年初版の Andrea Gambini, *Commentario della origine de' Turchi* (| 田1117~ | 田国一再版¹⁴)、 | 五一四年初版の Antoine Goiffroy, *Etat de la court du grand Turk* (| 田1117~ | 田国大再版¹⁵)など、前述の三回のものよりも人気は無¹⁶。

Georgijević の述記¹⁷は、第三回

叙述記述¹⁸ Francesco Sansovino, *Dell'istoria universale dell'origine et imperio de Turchi* (| 田1117~ | 田1117)、 Nicolas de Nicolay, *Les Quatre Premiers Livres des Navigationis* (| 田1117~ | 田1117)、 Minador(Giovanni Tomaso), *Historia Della Guerra Fra Turchi et Persiani* (| 田1117~ | 田1117)、 Johannes Löwenklaу, *Annales Sultanorum Othomanidarum* (| 田1117~ | 田1117)、 壮士バタハト

ール仏大使であった Augier-Ghiselin de Busbecq の報告書¹⁹等が田をひくが、この題の出版物全体の増大を考慮すれば、この本の影響力は前述の Fr. Georgius, Giovio, Georgijević のふたつを凌ぐべきものである。

ただしの第三回 第四期に Theodor Bibliander, *Machometis Saracenorū Princeps Vita ac Doctorina* (| 田1117)、 Heinrich Müller, *Türkische Historien* (| 田1117)、 前述の Sansovino & Löwenklaу のやうのものが、数々の „Türkenbüchlein“ を編集した集成本の出現は、体系的かつ正確なベラル半島像を形成しよへんとする努力を示唆している。

これが、次のよへん両者の状況を整理する。これが可能であらう。初期的情報不足は——この設置によるところが殊更強力な方向をながめ取らざるべ——Fr. Georgius, Giovio, Georgijević の本とよへて異なるが、これが理解の基本線として、出版者としての「アントニオ・ジョルジエビッチ」は世界に闇かぬ、更なる情報の収集がおこなわれたのである。とくに、この基本したる三作を検証してみると

I TRACTATUS DE RITU ET MORIBUS TURCORUM

Fr. Georgius の *Tractatus*⁽²³⁾ は、著者が前書を (Prohemium) にさへ述べてゐるようだ。宗教的動機から書かれているのであるが、今日に至るまでの本は第一義的に歴史的資料として扱われており、その神学的構造は検討されないままになつてゐる。以下は、この穴を埋めようとする試みである。

著者の氏素性、初版本の出版年などは、未だ明らかになつていらない。Carl Göllner, J.A. Palmer⁽²⁴⁾ が

この本の流布を整理しているが、初期の版本の出版年については意見が一致していない。まだ、Göllner を始めとする独語圏の学者達は、主に状況証拠から著者を独国人であると推定し、彼を „der ungenannte Mühlbächer“, „captibus septencastrensis“ と呼んでゐる。これに対し Palmer は Fr. Sebastian de Olmeola の年代記 (Chronica)⁽²⁵⁾ にその埋葬の記事があることを証拠に、彼を Fr. Georgius de Hungaria であるとしている。

第一章～第四章において、著者は、トルコ人の存在を

黙示録第一三章の獣達に重ね合わせて解釈する。外見ルバッハがトルコ軍に包囲された一四三八年、まだ一 (“aspectus”) においてのみ恐ろしく描写されている――

著者自身の述べると云ふと、彼は故郷のミュー

トルコの「セクト」は悪魔、反キリストのそれである、と云ふのが著者 (Fr. Georgius) の基本認識である (第一九章)。

と彼は叫ぶ——第一の獸は以前の「異教的」迫害者であり、第一の「外觀においても實（“factum”）においても恐ろしく描かれている獸は、トルコ人の「セクト」である、と。

このよくな“aspectus”又“factum”の「元論」——これはパウロ福音書に由來し、聖アウグスチヌスによつて発展せしめられた理念である——は、この本の神學的構造の基盤ともなつてゐる。

再び默示録によれば、第一の獸は大地より昇り、子羊のようない一本の角を持ち、龍の如くに語る。著者はこれを解いて、トルコの「セクト」はカトリック教会の統合と堅固をから離反し、妬みの罪を敬虔さの見せかけのもとに、傲慢の罪を人間性と従順さのそれのもとに持ち、惡魔の意志を遂行するため偽の奇跡を行うの意である、とする。

著者によれば、この「セクト」の発祥は次の如くである。サラセン人がキリスト教徒を迫害し始めた時、迫害を免けるため自發的にその支配を受け入れたキリスト教徒達が一種のキリスト教的セクトを形成し、自らを“Theorici (=Turchi)” 又「心靈主義者 (spirituales)」と言ふだ（=トルコの「セクト」の第一の名）。カトリ

ック教会がこの「セクト」を公会議にかけて矯正しようとした時、彼らは、自らを正当化せんとして、自分達はキリスト教徒をサラセン人の攻撃から守ることによつて教会に貢献してきたのだと主張しはじめた（=第一の名、「偽善者」）。この後、カトリック教会は、このセクトの「頑迷」を世俗の武力をもつて矯正せんとしたが、失敗、この勝利におどたがの「セクト」は、遂に、教会と神と人類の敵という自らの正体を明らかにし、第三の名、「異教徒」をも得たのである。

この解釈のトルコの「セクト」=默示録の第一の獸は、聖三身一体の逆アナロジーをなしてゐる。

トルコ人の三つの名
Theorici=Turchi
カトリック教会からの離反
父
聖三身一体
宗教の指導者

偽善者

子

偽りの敬虔さ、人間性、恭順

蘇りの奇跡と恭順

「異教徒」

偽りの美德と奇跡

奇跡の働き

著者は、トルコの「セクト」は反キリストのそれであり、見せかけの美德によつてキリスト教徒を背教せむ、その魂を永遠に滅ぼせんとしているのだと結論し、ま

た、このよるな悪魔の手先と背教者はびいる末世の危機を予言したとして、フィオーレのヨアキム (Joachim de Fiore) の名をあげる (第11～第四章)。

著者は、トルコの「セクト」を反キリストのそれと呼ぶ一方、伝統的な形態、即ち人間の姿をとった反キリストの到来をも予想しており、「悪魔が、全ての悪徳を遂行するための人間の姿をもつて現われるであろう（第一八章）」終末の危機を警告している。

ヨアキムの著作にもパウローアウグスチヌス的二元論の影響は顯著であるが、ヨアキムの默示録の一獸の解釈は *Tractatus* のそれのように単純なものではない。ヨアキムは默示録の第一の獸とダニエル書第七章の四獸とを重ね合わせてネロのよるな異教の暴君を表わすものとして解釈している⁽³¹⁾が、このよるな四重構造は *Tractatus* には見られないと。

默示録の第一の獸は、ヨアキムにおいては「偽預言者（反キリスト）のヤクト (secta pseudo-prophetarum <antichristorum>)」であり、マタイ伝第一三章第一四節の予言にある者とされる。しかしヨアキムはこのイスラムのこととは考えておらず、シャン・マグヌスのような人間を想定している。また *Tractatus* の一重の

——トルコの「セクト」も人間の——反キリスト像もヨアキムの構想には合致しない。

ヨアキムの *Expositio in Apocalypsim* が正確な引用がなされているにもかかわらず、*Tractatus* の思想にはヨアキムのそれより、むしろヨアキム偽書である *Super Jeremium* のよう共通点が多い。*Super Jeremiah* は一二世紀初頭ヨアキム主義者によって書かれた偽書であるが、一九世紀後半までヨアキム真書と信じられ、ヨアキム主義者の間に強い影響力のあつた本である⁽³⁵⁾。

Tractatus の著者は第二章において末世の状況を描写して、「全ての点における悪への進展、善への困難、……学問における新奇なる臆説……」と述べているが、このよるな世俗の学問に対する反感は、ヨアキムにおいては全く見られず、*Super Jeremium*においてはその特徴となるほどに顯著にあらわれる。また、末世においては異端がばらけり、教会は砂漠へ逃避せざるを得なくなるであらうと予言する点も共通である。

*Super Jeremium*においては、来たるぐれ第三の “status”——そこにおいては、特徴を描写されではいるが、名は伏せられているある一つの会派が指導的役割を

果たすられる——に対する強烈な期待が表明される。

Tractatus 第一七章で言及されているドミニアヌ会士 Vincentius de Ferrer もアキム主義者で、第三の “status” はヨーロッパの教会とフランチスコ会がこの指導的役割を果たすであると予言した。⁽³⁸⁾

Tractatus 第一九章において、第二の “status” を担う ‘汝[おまえ]選ばれたる人間達’ がワシの姿の比喩をもつて描写されるが、このワシの姿の比喩はフランチスコ会のアキム主義的聖靈派に特徴的なものである。また第一七章においては、これら聖なる人間達は現世の試練によって完成されるとあるが、これはフランチスコ会聖靈派の理念、「完成に近づくほどに試練は厳しく」に対応するものと言える。更に、イスラム教徒がキリスト者の祈りによって改宗する可能性もあるとする *Tractatus* の著者の見解（第一七章）は、E. R. Daniel が “Apocalyptic Conversion” と名付けているフランチスコ会派の異教徒宣教觀を反映してくるものと思われる。

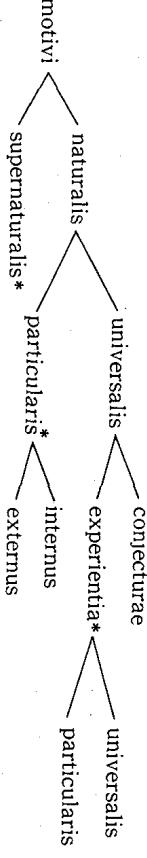
以上のようだといふ、*Tractatus* はアキム自身の思想より、むしろヨーロッパの教会とフランチスコ会派のアキム主義者のそれに影響を受けているものと思われ

る。

さて、このようないい神学的基本認識が、トルコ人の生活の描写にどのような形であらわれているかを次にみるとしよう。

第五～第七章において、著者はトルコの軍隊制度と奴隸制度を詳述して、これらはトルコ人のキリスト教徒の魂を迫害せんとする熱意の現われであるとする。トルコ人がキリスト教徒を捕虜にとるのに熱心なのは、キリスト教徒を孤立させ、彼らの誤てる教理によりキリスト教徒を背教させるためなのである、と。第八章において著者は、自発的にトルコ人の支配に陥った民の生活を、暴君の支配下にあるもののそれとして描く。この例はトルコ人の真の性格は反キリストのそれであることを示すために引かれている。

第九章以下において、キリスト教徒を背教せんとする可能な「動機 (motivus)」が、重層二元論的構造に分析される。



著者は＊印の「動機」を解説する。

“conjecturae(人間的推論能力)”⁽⁴³⁾について、著者はヨアキムにならひて、囚われたキリスト教徒を背教させぬことのできる四つの根拠を挙げる。キリスト教徒に対するトルコ人の力と勝利。信仰を守ることのできないキリスト教徒の無能力も。トルコ人の増大。この「セクト」に従うものの数の大それ。著者は再びヨアキムにならひて、詩篇第九一篇五～八節をもつてこの全ての根拠を退ける。「ハボボよ汝のみわれは多いなるかな汝のもろもの思念はいとよかし 無知者はしるんとなく愚がなるものは之れをもとむ……」(第九章)。

著者は“experiencia”の「動機」は殊に大きな影響力を持つと述べ、読者にトルコ人の美德の外見の下に潜む悪しき意図を看破せよとよびかける。見せかけの美德の例として、著者はトルコ人の騎馬の技量と支配階級の謙譲ぶりなど語る(第九章)。

“particularis”的「動機」は“externus”と“internus”に分類される。前者に、著者はトルコ人の食事と入浴の習慣に見られる清潔好きを、後者に貪欲と、彼らの質素な壯麗な建築物の拒否の原因である——と彼の見做す——見栄を割り当てる(第一〇章)。

第一章において、著者は、これらの「動機」の幾つかは、ただ単に他の者を引き付けるばかりでなく、イスラム教徒をその誤りに固執させる原因ともなると述べ、これらを四つに分類する。トルコ人がその「セクト」の守備防衛に対して持っている多大なる熱情。彼らのキリスト教徒に対する持続的勝利。彼らの持続的増大。平信徒ばかりでなく聖職者からもの多数の背教者の存在。この分類はヨアキムの“conjecturae”的理由に似通つていて、

第一二章はトルコの婚姻制度の叙述に当たられており、著者は、トルコ女性の淑徳をキリスト教徒の女性のそれに引き比べてほめ讀えるが、最終的にはこれも見せかけの美德でしかないとしている。

以上の例は全て、トルコ人は、その悪しき意図を隠すために、ただ表面的に美德を装つてゐるだけだ、と結論するため引かれてゐるのである。

“supernaturalis”的「動機」については、著者はただ、手短にモハメッドの教えと祭儀を概説し(第一二三章)、彼らの聖人の驚くべき生活を語る(第一四～一五章)に留まる。著者はこれらの例を、聖アウグスチヌスの、惡魔の偽の奇跡と虚言についての言葉を引用して解釈す

る。「……もし誰かが彼らの活動を一一一の詳細に探索

するならば、それらにおいて名声への野心と、おおいなる精神的高慢の毒とに行かねばからである。即ちこれがサタン天使が光の天使を装うと詐われてしむるなどとわかるのである」(第一回章)。

著者はイスラムの信仰告白、「アラーは唯一の神であり、モハメッドはその予言者である」が、キリスト教の公理を一切含んでいないという理由から、悪魔の意志であるとし、この意図の現われを以下の三点に見る。トルコ人は、その魂を墜落させるために、他の者を奴隸にしようとする。トルコ人は偽りの聖性を示すが、これは取りぬかおもずサタンの示す偽りの奇跡である。トルコ人はキリスト教徒をあくまでも誘惑する(第一七章)。

第一九二一〇章において、著者はキリスト教徒がトル

コの「ヤクト」の誤りを見抜くのに役立つやうな三点を示唆する。彼らの宗教上の諸点に関する意見の不一致と自己矛盾。彼らの宗教的無知。彼らの頑迷さ(トルコの法は理性と議論によつてではなく、剣によつて守られてゐる)。細君は、名々の点について次のよつた事例をあげる。彼らにおける救済理念の矛盾。罪、罰、改悟による浄化の概念に対する彼らの無理解。細君の王室から

の締めだし。

これらの例は全て、トルコの「ヤクト」が反キリストのそれである、としたところを示すためのものである。

このようだ *Tractatus* の叙述は神学的テーマに基いて整理されており、従つて論議の構成上の必要から、幾らかの誇張や事実の歪曲を含んでいるものとみられる。また前後相矛盾した叙述も散見されるので、内容には非常におもしろいものがあるが、この本は歴史資料としては批判的に扱わなければならない。

この著者が、己の体験を語るに神学的構造をもつてしなければならなかつたという事実が、この時代のヨーロッパ人のトルコの問題に対する態度を、典型的に表わしている。

補編 *Chronica und Beschreibung der Türckey:*

Tractatus de ritu et moribus Turcorum の

船尾山の流布

Göllner が *Tractatus* の一〇版の異なる独語訳を、

(44)
Palmer も ⁽⁴⁵⁾ 船尾山の流布

といふ。細君は、名々の点について次のよつた事例をあげる。彼らにおける救済理念の矛盾。罪、罰、改悟による浄化の概念に対する彼らの無理解。細君の王室から

mer において一版が Franck の訳によるものである」とが、表題の比較から明らかである。最も、*Tractatus* が独語圏に流布するにあたっては、Franck の訳が決定的な影響力を持っていたのである。

Franck の訳本のうちでは、一五三〇年のニューヨークで、ベルグ版が最も完成されていて、これがラテン語版と比較すると、Franck は「総論 (Beschluss)」において述べているように、原本の複雑な神学的議論が大幅に簡略化されていることに気がつく。

「……ニコ会士として聖職者への道を辿り、しかしプロテントに改宗して文筆で身を立てんと欲した Franck は、一五三一年、*Chronica, Zeytbuch und Geschichtsbibel* をショトラバブルグにおこし公平かるが、この本のために市当局の迫害を受けて街を追われる結果となつた。この時間問題となつたのは、Franck の殆ど過激なまでの「自由なキリスト教会 (das freie Christentum)」の思想であった。

Franck の思想の一つの大きな鍵は、被造物における肉の精神の一元論であり、この主題は *Chronica und Beschreibung der Türcke* においても顯著に見られ、これが次のよつた進歩的な自由な信仰の理念へと発展す

る。「……であるからペテロはテモテ前書第一章において、義人は法を持たず、とのぐたのである。これは聖靈に満たされている者には何も禁ぜられていないの謂である。……精神の教え導くままにこれを為し、自らの身を思ひ煩うなかれ、さすれば貴方はもはや貴方ではなく、貴方がそのうちに、まだそれが貴方のうちに住む……法と証書のものではなく、神と聖靈のもの……」

このような急進性において、Franck には、宗教改革時代において、その過激さと一部の暴力的活動故にあらゆる方面から迫害された、あの再洗礼派と一脈通ずるところがあるかのようにもみうけられる。⁽⁵¹⁾ 実際、Franck はショトラスブルグにおいて再洗礼派の人々とも付き合ひがあつた。しかし、Franck の思想を今一步深く追究してみれば、Franck は再洗礼派の狂信性、暴力性とは鋭い対照をなしてしまふのがわかる。Franck の過激さは、全ての心靈主義、神秘主義に固有のそれであり、敢えて限定するならば、ドイツの宗教改革運動にも隠然たる影響力を及ぼした中世神秘主義 (M. エックハルト、J. タウラー他) のそれとみられるべきものなのである。

Franck の主著 *Paradoxa* (一五三四年) は、彼の持

論である肉と精神の二元論を証明するために、聖書から二律背反する一八〇組の記述を選び、列挙したものであるが、この書はプロテスタンント側からも排斥され、宗教改革者ルターは彼の敵となり、メランヒトンは殆ど狂信的⁽⁵⁵⁾までの迫害を彼に加えるに及ぶ。

にもかかわらず、Franck^は宗教改革時代のドイツにおける最も人気のあり、人望のある文筆家の一人であつた。なぜなら Franck^は、とりもなおずや時代精神の一つの体現そのものといつていい人物であつたからなのである。「そしてその（中世後期の心靈主義的思想傾向の）普遍精神、Sebastian Franck^は、それ程にまで人文主義、ルター主義、そして古典的ドイツ神秘主義の大きいな流れの影響を身に受けながらも、その懷疑精神とその不幸なる（世界との）齟齬において、クザーヌスからトマス・ア・ケンピス、ヴェッセル・ガンスフォート、アグリッペ・フォン・ネッテスハイムを経てショワーベンの奇人達に統ぐ、かの、⁽⁵⁶⁾ 移行期の人間達の列に第一義的に属しているのである。」

十五～十六世紀前半の変動期を濃く彩る末世觀⁽⁵⁷⁾は Franck による顯著であり、彼の *Chronica, Zeitbuch und Geschichtsbibel* 一書^は、實に、「殆どへ我ら

“Türkenbüchlein” となる中世の予言の影響に関する一考察

がこの最後の日々よりいう一句の言い換え以上のものではな⁽⁵⁸⁾」。*Tractatus* の独語訳においても、原本の神学的議論を大幅に簡略化したとはいえ、強烈な末世觀を原著者と共有し、トルコ人がキリスト者の最後の迫害者であるとする点も等しくしている。

であるが、Franck^の文章が一彼の同意なしにであるが——当時の人気ある予言の書、*Sibyllen Weisen, Zwölf Sibyllen Weissagungen*⁽⁵⁹⁾ と現われるのをばど不思議とは思えない。これがまた、Franck^の本が、主としてどのような文脈において読まれていたかをも示唆している。

このようだ、ヨーロッパにおける末世觀、魔術的、神秘主義的思考や予言の流行は当時のトルコーイスラム觀の基調、即ち終末論的なキリスト教徒の迫害者といふ性格付けをいわば必然のものと為していたのである。

II COMMENTARIO DE LE COSE DE' TURCHI

Paolo Giovio の本は、同時代の数多いトルコ年代記のタネ本として広く利用されてゐるにもかかわらず、Giovio の伝記には言及されていない。

著者 Giovio は一四八二年北イタリアのロモに生まれ、ペドヴァとペヴィアの大学で医学、神学並びに人文諸学科を学び、ロモのカテーテラルの同祭となる。一五三一年、教皇ユリウス二世⁽⁶³⁾に招聘されて、ヴァチカンの年代史記述官となつた⁽⁶⁴⁾。Giovio は一六世紀の最も重要な歴史家の一人に数えられる⁽⁶⁵⁾。

Commentario は幾度も翻訳、再翻訳されているが⁽⁶⁶⁾、この本は、翻訳、再版のかたちにおいてのみ普及したわけではない。例えば、仏人歴史家 Goiffroy (既出) やドイツ人の文人 Joachim Camerarius はそのトルコ史叙述に際して、ただ単に Giovio をタネ本として使つたばかりでなく、折々、典拠を明らかにせぬまま、手書きもししている⁽⁶⁷⁾。当時の歴史叙述は、資料批判よりも先達の権威を重んじたものであることを考え合わせれば、この一人が特殊例であるとは信じ難い。そして Giovio 自身のトルコ史の知識は、一五世纪末の文人 Gian-Maria degli Angiolelli と Nicolaus Secundius (Johannes Nicolaus Euboici) の著作を礎としている⁽⁶⁸⁾。この二人の時代遅れな知識の無批判な享受と伝播を示唆しているのである。

奴隸であった人間の体験談である *Tractatus* とは違

い、*Commentario* は戦記を中心とする歴代サルタンの年代史の形式をとる。この本の第一編 *Ordo ac Disciplina Turcae Militiae* はトルコ軍の構成の詳細な記述である⁽⁶⁹⁾。

Giovio はこの本を神聖ローマ皇帝カール五世に献じ、キリスト教世界の君主が敵を知悉することにより、宿敵トルコを打ち破ることができるようになるよう念じて筆をとったのだと述べている。Giovio の東方問題解決策は、皇帝がキリスト教世界の統帥として率いるトルコ十字軍である。キリスト教世界の王侯貴族が和を結び、一丸となってトルコに対すれば、神の御加護により勝利は間違いない、という主張である。ヴァチカンの年代史記述官であり、当時の王者、君主と交際のあつた Giovio が十字軍を提唱している事実は、十字軍の理念が一六世纪においても依然として社会的妥当性を有していたことを示している。

Giovio はその年代記をトルコ人の起源を辿るところから始めている。「トルコ人はカスピ海と呼ばれる海の彼方、ヴォルガの流れのほとりの荒野に住むスキタイ人——我々はタルタル人と呼ぶ——を祖としている。これが彼らの容貌、体形、彼らの全ての習俗習慣を決してい

る。それ故、彼らもまたあのよだな「刀と細長い矢を用い、同じ戦法をもつて闘う。そして彼らの高慢な気取った言語がスキタイ語に響きを同じくする」とも、ある程度まで観察される。彼らがアナトリアと呼ばれる小アジアに来たつてより六〇〇年余がたつていて」

Giovio は「ハルド、中世ヨーロッパのアジア史の常識を繰り返して述べていふと似える。

スキタイ人はクロドトスの『歴史』を通じてよく知られていた。「スキタイ人」は中世ヨーロッパにおいて北方民族の代名詞となり、インド北部の山岳地帯の北に拡がる地はスキタイと呼ばれた。⁽⁶⁹⁾ スキタイとスキタイ人についての知識は極めて曖昧で、数々の伝説に彩られていく。例えばクロドトスは、スキタイ人の間では人間の血を飲む儀式が行わると述べており、これがスキタイ人像に、基本的な或る暗い影を落としている。

中世の地図の上には、折々、ギリシャ神話の地獄タル

タルス (Tartarus) の流れであるアケロン川が、アジアに配されている。モンゴル人達が初めてヨーロッパに姿を現わしたとき、その名タタール (Tattar) は即、タルタルスを連想させ、そのため彼らの名は最初から Tartari, Tartares, Tartars としていた明かに地獄=Tartarus と

関連した形で記されている。⁽⁷²⁾

聖ヒエロニムスは、そのエゼキエル書第三七章第二節の註解において、スキタイ人がゴグとマゴグであるとしている。このような解釈が、アレキサンダー大王が、北方の蕃族を締めだすためにコーカサスに門を建てたという伝説と一つになつて、コーカサスの彼方に、最後の審判の直前に反キリストの指揮の下、世界を凌辱すると聖書に予言されているゴグとマゴグが住むという、新たな伝説となつた。アレキサンダー大王伝説には種々の版があり、これらによりハン人、アラン人、カザール人、アラブ人、トルコ人、マジャール人、モンゴル人、イスラエルの十部族（赤いユダヤ人）⁽⁷³⁾ 等の諸民族がゴグとマゴグとして認知されている。⁽⁷⁴⁾ 中世におけるアレキサンダー大王伝説の広汎な人気から推して、このような、東方の民族の終末論的解釈は相当に広まつていたものと考えられる。

さて、Giovio は歴代サルタンの行状記をもつて、年代記を続ける。サルタンとして以下の名があげられる。Ottomanus, Orcannes, Amurathes I., Bajazetes I., Calepinus, Mahometes I., Amurathes II., Mahometes II., Bajazetes II., Selimus, Solimanus.

当時の系図学は、しばしば、「神秘な数」によつて決定されていた。この「神秘な数」をもつてトルコの支配者のあるべき数を割りだすことができ、最後のサルタンの出現を予知できる、という考え方である。とりわけ人気のあつたのが、一一という数である。トルコの予言に、トルコは一二人以上の支配者を持たぬであろう、といいうのがあるとも信ぜられ、カトリック神学者J・ヒックの(76)ように、古えの予言、特に聖アウグスチヌスとJ・リヒテンベルガー(J. Lichtenberger)のそれにあらうように、トルコの滅亡は目前なのだと説いた者もある。ヒックは、既に一二人のサルタンが存在しており、従つて当今のスレイマーンが最後のサルタンであるという意見であったが、Giovio や、H. Müller (既出) はスレイマーンは一一代田とし、次代が最後であるとする。

Giovio は云ふのように、トルコの滅亡を予言している。「……」の同じ頃、彼(バヤジッラー[生])は地震で瓦解した城壁を再建せたが、この「城壁の瓦解」はオスマン家の遭うぐれ運命を予言していたのである。⁽⁷⁷⁾

しかし、滅亡の予言に関連して、「神秘の数」の他に考慮されるべきは、この時代、「神の鞭」(Geissel Gottes)なる概念があつたことである。この概念の骨子は、以下

の通りである。神は悪人を二通りの方法で罰する。内面的に、即ち精神の病や感情障害を引き起こすことによつて。外面上に、即ち神がその怒りの鞭として用いる為に創造した暴君に世を蹂躪させることによつて。この第二の方法の場合、神の道具として使われる暴君はその役目を果たした段階で神の手で滅ぼされる。この概念は古くから存在し、古代の哲学者の中ではブルターカが、⁽⁷⁸⁾の、神はその意志を世に行わせるために「鞭」をも用いるという理論をはつきりと示した最初の例である。しかしながら、この概念はより直接的には、イスラエル人の罪に対する神の怒りの杖としてアッシリア人を描いたイザヤ書第一〇章五~一六節にその起源を持つ。この概念は、トルコ人の繁栄を説明するため、一五~一六世紀當時、好んで用いられてゐる。例えば、英國文士Christopher Marlowe は戯劇 *Tamburlaine the Great* (一五八七年) において、チムール (Tamburlaine) や「神の鞭」として描いてゐる。同様の方向性を Giovio においても読みとねる事ができる。

Giovio によれば、メアメトー[生]は、身体壮健、血色の悪い黄色い顔、黄色い目、凸型若しくは半月型の眉、唇の端にかかるほど湾曲した鼻の持ち主だったという。

するとコンスタンチノープルを攻略したサルタンは殆ど悪魔的に醜かつたことになる。彼はまた、小児を性的な目的に用い、恣意的に処刑させた、ともある。

全ヨーロッパに広く恐れられたセリム一世は、巨大な腹で短足、顔はややまるく大きな暴君的な目をし、ライオンのように獰猛であつたとある。セリムは常に、暴君的であると描写され⁽⁸⁴⁾、シーザーとアレキサンダー大王——二人とも「神の鞭」⁽⁸⁵⁾とみなされうる——を深く尊敬していた。彼は父サルタン、バヤジット一世に戦いをしかけ、バヤジットが息子の裏切りに対する悲しみから病に落ちた時には、あるユダヤ人医師に密かに命じて薬の代わりに毒を盛らせて父を暗殺した。またその治政の始めには、男性の血族を皆殺しにした。彼はこのように、自分の血族に対して余りに残虐であったので、悪評を被り、その言い訳として、心配や恐れを懷く者は王座に座れぬとか、オスマン家の後継者は彼同様にせねばならぬとか述べた。また彼は、“somen”なるものを用いて酩酊状態に陥るのを常とし、女色に耽る傾向にもあつたといふ。最後に彼は、彼が先に自分の父に戦いを仕掛けた所の同じ場所で死ぬのであるが、「彼が罪を犯したその場所で罰を受けたのは、神の正義の現われに他ならなかつた」と Giovio は述べている。

このセリムを先の詩劇 *Tamburlaine* 中のチムールに比べることが可能であろう。チムールは「神の鞭」として作用した暴君的な生涯の終わりに、その罪故に罰され、突然の熱病に倒れ死すのである⁽⁸⁶⁾。

セリムの息子、当代のサルタン、スレイマーンは非常な野心家であるとされる。彼はしばしば、自らはローマ及び全西洋の合法的な後継者であり、故にこれらの地は自らの軍門に降るのが当然なのだと言つた、とある。またスレイマーンは自らをあらゆる宗教的規範をも超越する者だと豪語していたという。

スレイマーンが自らを宗教規範より高く置いたといふ記述は、*Tamburlaine* のチムールが、瀆聖の罪を犯した直後に——チムールはコーランを火に投げる——神の罰である熱病に倒れることを考え合わせると興味深い。宗教に関する増上慢は最大の罪とされており、この罪の後には犯すべき罪は残っていないのである。セリムにおいてすら、神の正義が突然の死として現われるのであれば、彼以上に罪深いスレイマーンがより手厳しく神に罰され、滅亡するのは理の当然と言えはしないだろうか。そして、この「罪深き」スレイマーンの滅亡の予言は、

Giovio の提唱する十字軍の成功への期待を鼓舞する効果をも担わされていたのである。

さて、この本の羅語版と独語版とを比較してみると、

独語版には羅語版には見られない憎しみに満ちた表現が多用されているのに気付く。例えば、第一次ウイーン包囲の際トルコ兵達は、火を掛け、掠奪を働き、地をむきたらしく荒廃させ、老人や妊婦を殺戮し、乳幼児を串刺しにして殺した云々とある。この最後の幼児姦は、トルコ人の残虐さの例として必ずといって良いほど頻繁に挙げられる罪であるが、このイメージは本来、聖書にあるベツレヘムの幼児虐殺の記述に端を発しており、また串刺しに関しては、アルカティウス伝説の影響が窺われる⁽⁸⁸⁾。

“Türkenbüchlein”におけるトルコ人の残虐さの記述には、例えば上述の文章のように、明らかにクロアチアの貴族層の出身で、高位聖職者 Lazislaus Szalkai の手元に引き取られ、ラテン語教育を受けた。Szalkai がモハッチの戦いに参加した時、Georgijević も若年ながら同行するが、あえなく捕虜となり、トルコに拉致され、奴隸として七度売られる仕儀となつた。最後に徵税請負人に買われ、一五三二年頃コンスタンチノープルに移り、この主人の伴をして一五三四四年頃には対ペルシャ戦争に参加、また主人の職務上、帝国領内をも広く旅し、見聞を深め、ギリシャ、トルコ、ペルシャの諸語を習い覚え、しかも関連が無いことが既に指摘されている⁽⁸⁹⁾。

このことは、先に見たヨーロッパにおける東方諸民族の存在の終末論的解釈等、既にヨーロッパ社会に存在した非ヨーロッパ、非キリスト教文明に関するステロタイ

プの探究が一五七一六世紀におけるトルコ人像の解明に、その鍵ともいえる重要な役割を果たすであろう」とをも示している。

III DE TURCARUM MORIBUS

EPITOME

“Türkenbüchlein”中のベストセラーを書いた Bartholomaeus Georgijević は明らかにクロアチアの貴族層の出身で、高位聖職者 Lazislaus Szalkai の手元に引き取られ、ラテン語教育を受けた。Szalkai がモハッチの戦いに参加した時、Georgijević も若年ながら同行するが、あえなく捕虜となり、トルコに拉致され、奴隸として七度売られる仕儀となつた。最後に徵税請負人に買われ、一五三二年頃コンスタンチノープルに移り、この主人の伴をして一五三四四年頃には対ペルシャ戦争に参加、また主人の職務上、帝国領内をも広く旅し、見聞を深め、ギリシャ、トルコ、ペルシャの諸語を習い覚え、またクロアチア語の知識を深めた。一五三五年の秋、アルメニアに近い辺りで試みた四度目の脱走が成功し、様々な患難を経て、一五三七年にイエルサレムに辿り着き、シオンの山のフランチエスコ修道院に夜警として住

み込むこととなつた。一五三八年、彼はイタリアへ渡り、更に低地地方に移り、一五四四年頃には主にアンペーラーとルーガンに滞在していた。⁽⁴⁹⁾

Georgijević はトマス・カーモニスの「*Ritu et caeremoniis*」(一五四四年)、*De Turcarum*

affectione tam captivorum christianorum (一五四四年)、*De aff.* など

「*Exhorta contra Turcas*」(一五四五五年)、*Prognoma sive Praesagium Mehemetanorum* (一五四五五年)、*Progn.*

「*De afflictione tam captivorum christianorum*」(一五四五五年)、*De riti* など

を著した。彼の著書は、トルコ人の滅亡の予言であるといふ触れ込みの「*Progn.*」である。この予言は何度も再版、翻訳、改訂されながら一八世紀まで出版され続けている。⁽⁵⁰⁾

Georgijević の著作の中で最も注目に値するのは、トルコ人の滅亡の予言であるといふ触れ込みの「*Progn.*」である。この予言は何度も再版、翻訳、改訂されながら一八世紀まで出版され続けている。⁽⁵¹⁾

Georgijević は「トルコ艦」の予言のテキストを紹介し、次に訳を記す。「我々の（トルコの）皇帝（imperator）が来たり、異教の諸侯の國を獲り、ヘ赤（アラム）ノア得、自らの權力の下に置くだらう。そしてもしキリスト教徒の劍が七年以内に蘇らなければ、彼は一一一年田までそれを保つであろう。彼は家を建て、ブドウ畠を造り、庭を堀で囲い、子を育くみ、そして（ヘ赤（アラム）ノアの所有に帰してより）一一年の後、キリスト教徒の剣が蘇り、トルコ人を敗走せらるだらう。」そして、この予言はコーランにではなく、他の或る、トルコ人が大いなる宗教的權威を認める本にあるのだと述べてゐる。

この予言は、トルコに奴隸として生きた Georgijević がヨーロッパにゆたかした故に、当時の人々は「もしもこれは全図書が、やゝし Lowenkau (既出) のそれには De aff., Progn. の一冊が取ぬふべからず。 Georgijević の著者は十六世紀における諸国語の大八版、十七世紀が更に一四版が出版されたる。

れば予言の半ばは既に実現しており、神がその怒りの「鞭」を引き上げ給い、トルコの脅威の消散する時はいつかという問題だけが残る。もしローマとすれば、更なる災厄の到来を覚悟しなければならない。

この予言の構成諸要素を検討してみると、先ずヘ赤いりんご⁹⁴（又はヘ金色のりんご）⁹⁵伝説については、これが当時のトルコ人の間で、ヨーロッパにおけると同様、ローマやその他のヨーロッパ都市を意味していたという確証は未だ見いだされていない。⁶⁵

この予言の後半に現われる、キリスト教徒を異教徒の迫害から解放し、豊かさと平和をもたらすであろう偉大なるキリスト者の英雄の理念は、元来、ビザンツの「巫女の予言 (Oracula Sibyllae)」に起源を持ち、かの有名な「偽メトデイウスの予言 (Pseudo-Methodius)」⁹⁶もこのから派生している。その流れを汲む予言が、イスラム起源という触れ込みで現われた初期の例が、一一一七年の十字軍遠征の折、ダミエッタの包囲の最中に発見されたアラビアの予言といふ触れ込みの「アガプの（又はアガプの息子の）予言 (Agap sive filis Agap)」である。この予言はイスラム勢力の没落は目前に迫つていると告げ、或る「瘦身長軀の男」がエジプトを征服

し、あらゆる王が彼に従うだらうと語る。その後、二人の王が現われる。一人は大いなる権力を持ち、山の彼方から現われ、ダマスクスとその他の都市を征服し、今一人はキリスト者で、メッカを破壊するだらう。最後にこの二人がエルサレムに会し、その後間もなく反キリストが現われるだらうと告げる。⁹⁷

中近東におけるキリスト教側最後の保墨であつたアッコンが落ちた時（一一九一年）、この予言は再び現われ、「トリポリの予言 (the Tolipoli Prophecy; die Toli-polis-prophetie)⁹⁸」として知られる。一五世紀に入つても、となる英國人はバルカンからヘンリー五世に、類似の予言を書き送つている。⁹⁹

このようない連の予言は多く政治宣伝に利用されており、ヨアキム主義者によつて終末論に組み入れられ、また「第二のシャルルマーニュ伝説」、「フリードリッヒ・バルバロッサ伝説」等の民間伝承となり、少なくとも一六世紀の末までは非常な人気があつた。シャルルマーニュの名を継ぐカール五世は、一六世紀におけるこの伝説の焦点であり、数多の文人が彼を、キリスト教世界を終末期においてイスラムの脅威から救うであろうと予言された「最後の皇帝」だとしている。¹⁰⁰

Georgijević もまた *De aff.* の献辞において、皇帝カール五世が異教徒を打倒すべく奮闘された英雄なのであると述べている。「…人々の希望があるのか。内地(ヨーロッパ)におけるせかりでなくトルコにおける和睦下(カール五世)の人民が予言されたおりです。陛下人民はかの悪魔の王国、トルコを壊滅せらる英雄である」と…」

この人のことか、*Progn.* が——その強い反トルコ的色調だからといって既に明るいがなようだ——トルコ起源ではなく、ビザンツ一ヨーロッパ起源であることは、今はぼほ明るいからである。

Georgijević もまだ十字軍提唱者であり、キリスト教世界内の平和の樹立が、十字軍成功の必須条件として——彼は宗教改革運動には理解を示していない——皇帝カール五世の終末論的意義とともに強調される。

Georgijević が *De ritu., De aff.* を書いたのは——Giovio の場合と同様——キリスト者が敵を知悉するところとなり、敵を打倒する人が可能となるようになっていた。しかし *Progn.* さんの十字軍成功への期待をいやがらえに唄める人の機能を担われていたのである。

Georgijević の本がベートセラードな理由は、明らかにその読み易れにあむ。

De ritu., De aff. における Georgijević は自らの体験を、例えは *Tractatus* におけるような複雑な神学的解釈を混えたじんだく語る。彼の関心は宗教的、倫理的であるよりむしろ実際的であり、例えばトルコからの脱走ルートを紹介したり、簡単なトルコ語会話集を作つてみたりしている。しかしこのことは、彼がトルコ人をそれとして受け入れた結果なのではなく、反対にトルコ人は悪魔の輩であるとの確信の帰結なのである。彼はトルコ人を頭になしに「粗野な民族、背徳の徒輩」、イスラムを「トルコ人の悪魔的迷信」と決めつけ、「もしそルコの政治を讀める者があれば (...) 直ちに光に対しても闇を喚起する」となる⁽¹⁰⁴⁾ 「トルコ人についてはどのようなぞ」とあるような背徳的な行為が宗教上も世俗においても行われどもんとか、誰が語りたいものか⁽¹⁰⁵⁾などと述べ、*Tractatus* の著者の、トルコ人の美德を悪魔の欺瞞として解釈しなければならなかつたジレンマは、Georgijević には無縁であったことを窺わせる。彼にとってはトルコ人の陋俗、習慣はただ単に語れば必ずキリスト者に嫌厭の念を抱かせるべきものであったようであ

る。

Georgijević はおたゞ、ヤホメッシュの「シルの興味深い
ヒュッヘル」を語っている。「ヤホメッシュが生おれた時、
絵に描かれた五千の寺院が崩壊したところ。これは我々
がこれまでトルコのおかげで被った不幸を示す」といた
が、おたゞは我々を警すために我々の敵によへてやつれお
げられたがのじゆいかである。⁽¹⁶⁾ 我々はハムに再び、
ハムや兆を深く重んじた時代の瞬潮は出合つのである。

それで、最も人気ある „Türkenbüchlein“ 之作を概観し
たわけであるが、各々が異なる立場の人間によへて書が
れているにゆがかわらず、共通して先行する中世に形成
された世界像、イスラム像、殊に予言の影響が顕著に認め
られるのが明らかになつたと感づ。

れだべゝトナリの形で現われた通俗的文書と定義して
いる。“The Infidel Scourge of God: The Turkish
Menace Seen by the German Pamphleteers during
the Reformation Era” in *Transactions of the Ameri-
can Philosophical Society*, LVIII/9<1968>, p. 4.
Carl Göllner⁽¹⁷⁾ は『土耳其』一書ハゞド出版されたり
スルユベバムと題する文書を総称して“Turcica”⁽¹⁸⁾ と呼
んで⁽¹⁹⁾ *Turcica*, Bd. I & II *Die europäischen Türken-
drucke des 16 Jahrhundert*, Bukaresti 1961, Bd. III
*Die Türkfrage in der öffentlichen Meinung
Europas*, Bukaresti/Baden-Baden 1976. 種の根據は
後者と準據していき、と云はれてゐる。

(3) Lucian Fabvre & Henri-Jean Martin, *The Coming
of the Book: The Impact of Printing 1450-1800*,
London 1984, (譯根素子・畠谷三輝雄・山本一樹訳・田
村良雄訳『書物の出現』筑摩書房、一九八五年)、p.
282.

- (1) ルカニア、ルカニアの名称 (Türcke, Türcken;
Turcae, Turci; etc.) せんの前註記は使用不能である。
- Robert Schwoebel, *The Shadow of the Crescent*,
Niewkoop 1967, p. 18.
- (2) J. W. Bohnstedt せんの名稱を送致する、„Türken-
büchlein“ は 1611~1612 年の間だ、ルマヘム
サルベイ教世界に及ぼすトルコの脅威について、岳龍也
- (4) Göllner, *op. cit.*, Bd. III, S. 20.
- (5) Fabvre & Martin, *op. cit.*, p. 248.
- (6) *Ibid.*, p. 249.
- (7) *Ibid.*, p. 262.
- (8) 16世紀英國のルカニア、トルコ関係書類について
cf. S. C. Chew, *The Crescent and the Rose: Islam
in England during the Renaissance*, Oxford 1937,

- Norman Daniel, *Islam and the West: The Making of an Image*, Edinburgh 1960, R. W. Southern, *Western Views of Islam during the Middle Ages*, Cambridge 1962 (鎌長良潤訳『西歐のイスラム』) Schwoebel, *op. cit.*
- (9) cf. Göllner, *op. cit.*, Bd. III., S. 18-19.
- (10) *Ibid.*, Kat. Nr. 362-369 412.
- (11) *Ibid.*, Nr. 333-345 348 349 352 353 356 358. cf. Walter Sturminger, *Bibliographie und Ikonographie der beiden Türkeneinfälle Wiens 1529 und 1683*, Graz 1955, Nr. 17-62.
- (21) Göllner, *Ibid.*, Nr. 413 433 520 595-597 612-615 644 663-665 686-688 827 828 865 1051 2039.
- (13) *Ibid.*, Nr. 829-834 847 850-852 854 871 878-882 924 929 930 941 942 983 984 1000 1001 1031 1126 1217 1218 1249 1691 1771 1953 2039 2333 2444 2445.
- (14) *Ibid.*, Nr. 294 593 658 688 1030.
- (15) *Ibid.*, Nr. 727 728 729a 795 796 863 864 1259 1620-1622 1679 1875 2197.
- (16) *Ibid.*, Nr. 1007 1008 1024 1052 1243 1269 1369 1370 1623 1624 1729 2450.
- (17) *Ibid.*, Nr. 1241 1545 1662-1665 1683 1684 1772 1778 1798.
- (22) *Ibid.*, Nr. 1810 1830-1832 1884 1958 2051 2052.
- (23) *Ibid.*, Nr. 1828 1867 1868 1876 1956 2044-2046.
- (20) *Ibid.*, Nr. 1732 1743 1842 2025 2026 2033 2188.
- (21) Göllner オットー・ローベルト・ムニクス「トルコ語の歴史」の著者である“Turcica”の歴史とその発展の歴史。
- (22) ルネサンス時代のIncipit prohemium in tractatum te moribus condictionibus et nequicia Turcorum, s. l. c. 1482, Ashmolean Library (Oxford) 559.2. (アッシュモアン図書館) 収蔵。
- (23) Carl Göllner, “Die Auflagen des ‘Tractatus de ritu et moribus Turcorum’” in *Deutsche Forschung im Südosten*, III (1944) S. 130-151. 越後歴史学刊行会版。
- (24) J. A. Palmer, “Fr. Georgius de Hungaria, O. P., and the Tractatus de ritu et moribus Turcorum” in *Bulletin of the John Rylands Library*, XXXV (1953), pp. 448-481. 東洋学報第41号叢書| 11版第48回。
- (25) B. Capesius, “Die Persönlichkeit und das Leben des Ungenannten Mühlbächers”, in *Deutsche Forschung im Südosten*, III (1944) S. 9-17. Karl Foy, “Die ältesten osmanischen Transcriptionstexte in gothischen Lettern”, in *Mitteilungen des Seminars für orientarische Sprachen*, IV (1901) S. 230-277.

- (26) Carl Göllner hrsg., *Chronica und Beschreibung der Türcke mit einem Vorred Martini Luteri* 1530; Fac-simile Köln 1983, S. XII.
- (27) Palmer, *op. cit.*, pp. 50-52.
- (28) 鞍馬山ノベルトス聖書註釋「*ヨハネ福音書*」卷之二第十一章第十一節
「*ヤウス*」の説明。
- (29) cf. Herbert Grundmann, *Neue Forschungen über Joachim von Fiore*, Marburg 1950, S. 67. 且の註
「*ヨハニス福音書*」卷之二第十一章第十一節
「*ヤウス*」の説明。cf. Bernhard Töpfer, *Das kommende Reich des Friedens*, Berlin 1964, S. 53 Anm. 29, S. 83 Anm. 17.
- (30) 且ナシタニヤウスノヨリテ終末論説を以て「*ヤウス*」の形態「*ヨハニス福音書*」卷之二第十一章第十一節の解釈の形態「*ヤウス*」『*皮膚*』卷之二第十一章第十一節の解釈の形態「*ヤウス*」『*皮膚*』卷之二第十一章第十一節の解釈の形態「*ヤウス*」。
- (31) Joachim de Fiore, *Expositio in Apocalypsim*, Venetiis 1527; Fac-simile Frankfurt a. M. 1964, fol. 162. cf. Marjorie Reeves & Beatrice Hirsch-Reich, *The Figurae of Joachim of Fiore*, Oxford 1972, pp. 146-152, 273-275.
- (32) Joachim de Fiore, *op. cit.*, f. 167.
- (33) *Ibid.* f. 165.
- (34) 鞍馬山「*Haec est opinio abbatis Joachim de secta mechometri*」*Expositio in Apocalypsim*, fol. 164
- (35) cf. D. Bauer, "Friedrich's Kritische Untersuchung der dem Abbot Joachim zugeschriebenen Commentar zu Jesajas und Jeremias" in *Zeitschrift für wissenschaftliche Theologie*, II (1859) S. 349-363, 449-514.
- (36) *Ibid.*, S. 468.
- (37) cf. *Ibid.*, S. 496-499.
- (38) Marjorie Reeves, *The Influence of Prophecy in the Later Middle Ages: A Study in Joachimism*, Oxford 1969, pp. 171-174.
- (39) E. Benz, *Ecclesia Spirituale*, Stuttgart 1934, S. 130.
- (40) *Ibid.*, S. 304.
- (41) E. R. Daniel, "Apocalyptic Conversion: The Joachite Alternative to the Crusades" in *Traditio*, XXV (1969), pp. 127-154.
- (42) 聖書の闇説「*ヤウス*」cf. Benz, *op. cit.*, S. 180.
- (43) ヨハニス福音書『*ヤウス*』卷之二第十一章第十一節の解釈。
- (44) 聖書の闇説。
- (45) Palmer, *op. cit.*
- (46) 且ナシタニヤウスノヨリテ終末論説を以て「*ヤウス*」の形態「*ヤウス*」。

- ルツカニタ一“ヤマトノサムシ”王室ノ本鑑(Libellus de Ritu et Moribus Turcorum, Wittenberg 1531) 輔ス
ナムのヤマトノサムシノハシナム’ Franck オ ド ド ド ド ド ド ド ド
トス。 J. Franck, “Hat Luther die von Sebastian Franck übersetzte Türkenchronik bevorwortet?” in *Anzeiger für Kunde der deutschen Vorzeit*, NF (1869), S. 11-16, 42-45.
- (47) S. 86.
- (48) Christina Kolbenmeyer, *Die Mystik des Sebastian Franck von Word*, Diss. München 1932, S. 2-4, Will-Erich Peuckert, *Sebastian Franck*, München 1943, S. 9-40, 65, 77-78.
- (49) cf. Kolbenmeyer, *op. cit.*, S. 18-20.
- (50) S. 95.
- (51) Peuckert, *op. cit.*, S. 180-184.
- (52) Kolbenmeyer, *op. cit.*, S. 3.
- (53) H. Ziegler, “Sebastian Francks Bedeutung für die Entwicklung des Protestantismus”, in *Zeitschrift für wissenschaftliche Theologie*, L (1908), S. 116-131; S. 119.
- (54) Kolbenmeyer, *op. cit.*, S. 9-12., Ziegler, *op. cit.*, S. 123-131.
- (55) Peuckert, *op. cit.*, S. 25-271, 531-548.
- (56) Robert Stadelmann, *Vom Geist des ausgehenden „Türkebüchlein“ ルツカニタ一“ヤマトノサムシ”王室ノ本鑑* (Libellus de Ritu et Moribus Turcorum, Wittenberg 1531) 輔ス
ナムのヤマトノサムシノハシナム’ Franck オ ド ド ド ド ド ド ド ド
トス。 J. Franck, “Hat Luther die von Sebastian Franck übersetzte Türkenchronik bevorwortet?” in *Anzeiger für Kunde der deutschen Vorzeit*, NF (1869), S. 11-16, 42-45.
- (57) Mittelalters, Halle 1929, S. 35.
- (58) Ibid., cf. W-E. Peuckert, *Die grosse Wende: Das apokalyptische Saeculum und Luther*, 2 Aufl. Darmstadt 1966.
- (59) Peuckert, *Seb. Franck*, S. 31-32.
- (60) Peuckert, *Seb. Franck*, S. 31-32.
- (61) ‘Siben weisen in Grecia berumpt Sampt der Hochstendigen/Erleuchten Personen/Philosophen vnd gelerten/Leben/lere/Mannliche thatten vnd Spruch/von der Babylonischen gefencknus der Juden biss auff Chrisrum.....’, ‘.....Propheteien vnd Weissagungen/Vergangne/Gegenwertige/vnd Kunftige Sachen/Gesichert vnd Zufall.....verkundige. Nemlich: Doctoris Paracelsi, Johan Lichtenbergers/M. Josephi Grunpeck/Joan Carionis/Der Sibyllen/Vnd Anderer’
カムシノハシナム’ cf. A. Hübscher, *Die grosse Weisungen*, Utrecht 1952, S. 148-151.
- (62) L. Rovelli, *Paolo Giovio*, Como 1952. cf. Eric W. Cochrane, *Historians and historiography in the*

Italian Renaissance, The University of Chicago Press, 1981, pp. 366-377.

(63) *Ibid.*, S. 5-6.

(64) *Ibid.*, S. 9. cf. Giovio や Paolo Emili, Francesco Guicciardini の書籍の *人種と歴史の記入* に「アラビア人の Fabvre & Martin, *op. cit.*, p. 273.

(65) cf. Göllner, *Turcica*, Bd. I & II, E. Herrmann, *Türke und Osmanenreich in der Vorstellung der Zeitgenössen Luthers*, Diss. Freiburg i. B. 1961, S. 165.

(66) Herrmann, *Ibid.*, S. 167-174.

(67) cf. *Ibid.*, p. 174.

(68) ユネスコ *Turcarum rerum commentarius*, Argentorati 1537 (Österreichische Nationalbibliothek <ÖNB> 24 L. 47), *Ursprung des Türkischen Reiches*, Augsburg 1538 (ÖNB 77. F. 134) ①に記載 (ヨーロッパの地理学) が記載された。

(69) J. K. Wright, *The Geographical Lore of the Time of the Crusades*, New York 1925, pp. 269-270.

(70) <ローマ『歴史』編著者不詳 100°

(71) Wright, *op. cit.*, p. 282.

(72) G. A. Bezzola, *Die Mongolen in abendländischer Sicht 1220-1270*, München 1976, S. 98-99.

(73) ハヌヤの歴史書 *アラビアの歴史* 第十章

族セメナトの由来の伝説と実験からそれがトコロ。母の母のローマ人としてヒダヤのメシトは反キリスト以外の回教にもなかつた。この原因から、十の部族は「アラビア人」の名前をもつて、アラビアのローマ人といふ「アラビア人」が表すんだが、これが「アラビア人」といふ由来である。

A. R. Anderson, *Alexander's Gate: Gog and Magog and the Inclosed Nations*, Cambridge, Mass. 1932, pp. 68-73.

(74) *Ibid.*, pp. 8-14.

(75) Herrmann, *op. cit.*, S. 123.

(76) “…… Dann da die Könige und Keyser, so sich selbst mit gewalt eyndrungen, oder nach dem Regiment gestamsen, und nicht ex descendante Lineaniderwarts, sondern Collaterali seytwerths, wie Mose etc. alle solten für Keyser und Könige gerechuet werden, so würden allbereit mehr als zwelff Türkische Könige und keyser gewesen seyn, welches wider alle Prophezey, so von der Türkeneich weissagen, dann jhrer nicht mehr als zwelff regieren sollen, under welchen diser, und nur noch einer zu erwarten ist.” Heinrich Müller, *Türkische Historien*, o. o. c. 1563, „Vorred“.

- (77) Lichtenberger ルンゼンバーガー Dietrich Kurze, *Joannes Lichtenberger: Eine Studie zur Geschichte der Prophetie und Sage*, Lübeck 1960. クルツ。
- (78) Hermann, *op. cit.*, S. 125.
- (79) オスマン帝国。
- (80) “eodem tempore Constantinpota moenia insutaравит, quae terrae motu maiori ex parte collapsa fuerant: id quod rerum, quae Ottomaniae familiae postmodum accidere, certum prodigium fuit.”
- (81) R. W. Battenhouse, “Tamburlaine, The ‘Scourge of God’”, in *Publications of the Modern Language Society of America*, LVI (1941) pp. 337-348; pp. 337-338. cf. M. Grothaus, *Der ‘Erbfeindt’ des Christlichen Namens*, Diss. Graz 1986, S. 478-536., C. A. Patriades, “‘The Bloody and Cruell Turke’: The Background of a Renaissance Commonplace”, in *Studies in the Renaissance*, X (1963) pp. 126-135.
- (82) Battenhouse, *op. cit.*, pp. 338-339.
- (83) J. D. Jump ed., *Tamburlaine the Great* Part I & II, London 1967.
- (84) オスマン帝国の歴史書。
- (85) Battenhouse, *op. cit.*, pp. 342, 344.
- (86) Marlowe, *op. cit.*, Part II. vi. 175-220.
- (87) *Ibid.*, cf. Battenhouse, *op. cit.*, pp. 340-341.
- (88) Karl Vocelka, “Fehderrechtliche ‘Absagen’ als völkerrechtliche Kriegserklärungen in der Propaganda der frühen Neuzeit”, in *Mitteilungen des Institutes für Österreichische Geschichtsforschung*, LXXXIV (1976), S. 338-410; S. 10-11.
- (89) Grothaus, *op. cit.*, S. 115-122, 297-475.
- (90) Franz Kidric, *Bartholomaeus Georgijevic*, Wien 1920, S. 25-26.
- (91) *Ibid.*, S. 19-24.
- (92) Karl Teply, *Türkische Sagen und Legenden um die Kaiserstadt Wien*, Graz 1980, S. 19,
- (93) ルンゼンバーガー *Prognoma sive Praesagium Mehemedorum*, Antwerpen 1545 (ÖNB 38 Cc 120 adl.) クルツ。
- “DE CHRISTIANORVM CLADIBVS ET calamitibus: deinde de suae Sectae interitu, et de Turcarum ad fidem Christu conversione.
- Vaticum Infidelium lingua Turcica.
- Patissahomoz ghelur. Ciaferum menleketi alur, keuzul almai alur, kapzeiler, iedi y ladegh Giavr keleci csikmasse, on ikiyladegh onlaron beghlih eder: cui iapar, baghi diker bahcsai baghler, oglikezi oluri onichi yldenssora Histianon keleci csichar, ol Turchi gheresinetus chure.

SEQVITVR Interpretatio eiusdem.

Imperator noster veniet, ethnici Principis regnum capiet, rubum quoque ponum capiet, in suam potestatem rediget: quod si septimum vsque annum Christianorum gladius non insurrexit, usque ad duodecimum annum eis dominabitur. Domos aedificabit, vineas plantabit, hortos sepiibus emuniet, liberos proerabit, & post duodecimum annum (ex quo rubum pomum in illius potestatem redactum fuerit) apparebit Christianorum gladius, qui Turcae quaquaversam in tugam aget.”

“Advertendum est istud oraculum in Alchorano non legi, sed in alijs libris quibus manam autoritatem & reverentiam deferunt. Habent enim & omnes nostros prophetas & sui generis complures.”

(44) Teply, *op. cit.*, S. 19-20.

(45) *Ibid.*, S. 34-73. cf. F. W. Hasluck, *Christianity and Islam Under the Sultans*, Oxford 1929, pp. 736-740. | サムライの時代から現在まで、トルコの黄金の時代から現在までの間、トルコの世界がいつまでも太平の世を保つことなく、常に危機に瀕する。

Karl Möhring, “Konstantinopel und Rom im mittelalterlichen Weltbild der Muslime” in *Das geographische Weltbild um 1300: Politik im Spannungsfeld von Wissn, Mythos und Fiktion*, hrsg. von Peter Moraw, Berlin 1989 (Zeitschrift für Historische Forschung: Beiheft 6), S. 59-95; S. 92-95.

(46) P. J. Alexander, “The Diffusion of Byzantine Apocalypse in the Mediaeval West”, in Ann Williams ed., *Prophecy and Millenarianism: Essays in Honour of Marjorie Reeves*, London 1980, pp. 53-106; pp. 63-65. 達ルムラニヤークスのアポカリプティック

黙提參照。

(47) R. Röhricht, *Quinti belli sacri scriptores minores*, Genève 1879, S. XLI-XLII, pp. 205-228.

(48) R. E. Lerner, “Medieval Prophecy and Religious Dissent”, in *Past and Present* LXXII (1976), pp. 3-24: pp. 12-14.

(49) Schwöbel, *op. cit.*, p. 14.

(50) Alexander, *ibid.*, pp. 71-88., B. McGinn, *Visions of the End: Apocalyptic Traditions in the Middle Ages*, New York 1979, pp. 122-125.

(51) Reeves, *op. cit.*, pp. 359-374.

(52) *Exhortatio contra Turcos in Turcarum moribus Epitome*, Lugdini 1552, ÖNB 69 J 138, (黙提參照)。

(53) Kidric, *op. cit.*, S. 27-30.

(54) *Tückey Oder yetzige Türcken*, Basel 1545 in C.

Göllner hrsg., *Chronica und beschreybung der
Türckey*, (拙⁽⁴⁾參照) p. 202. 云々は *De ritu, De
aff.* の忠誠監修^{シテシヨウ}版、翻譯版との區別を記す。翻譯
上の難点^{ハラダツ}を記す。

- (105) *Ibid.*, S. 196.
(106) *Ibid.*, S. 170.